

国際インターンシッププログラム参加から学んだこと

山内 愛*

1. はじめに

国際インターンシッププログラムは、博士論文作成に対し、海外の研究機関の研究者による指導のもとで調査・研究を行う機会を提供していただき、国際的に高い資質を持つ教育実践学研究者・指導者を目指すことを目的としたプログラムです⁽¹⁾。プログラム内容について、派遣期間は、2週間～8週間程度、派遣先は、海外の大学・研究機関であり、私は平成25年度、27年度にクイーンズランド工科大学（オーストラリア）、平成26年度に香港中文大学へインターンシップの参加をさせていただきました。そこでこれら三度のインターンシップ参加から学んだことを、インターンシップの応募、参加、参加後において報告いたします。

2. インターンシップ応募

インターンシップ派遣の応募の際に一番難しいと感じたのは、派遣先や受け入れ教員を見つけ、派遣の受け入れを許可してもらうことです。私の場合は、研究テーマから注目する論文の論文筆者や研究機関に所属している研究者の方々にe-mailで連絡を取ることから始めました。初めの連絡は学生よりも教授の立場からの方が効果的と考え、指導教員にお願いをしました。複数の方にメールを送ったり、返信がなくても何度か連絡したりすることで返信して下さる研究者が出てきます。そこから連絡のやり取りをしていく中で関係を築き、派遣の受け入れを許可していただきました。

このように私はe-mailのやり取りから受け入れ先を見つけましたが、見ず知らずの者に対し受け入れを許可いただけたのは本当にありがたく、幸いでした。この体験から、工夫しながら諦めずに

連絡を取ること、熱意を伝えることで、対応して下さる方が必ずいる、ということをおぼることができました。

3. インターンシップ参加

インターンシップの研究テーマは博士論文の研究に関連のあるテーマを設定します。クイーンズランド工科大学でのインターンシップ参加においては「オーストラリア連邦におけるSchool Based Youth Health Nurse（以下SBYHN）の現状」をテーマとし、受け入れ先教員であるMarguerite Sendall先生の指導のもと、研究を行いました。SBYHNはオーストラリアクイーンズランド州の公立セカンダリスクール（日本の中等教育学校にあたる）に配置されている看護師で、1999年から始まった制度です。SBYHNの職務内容としては、健康教育や個別の健康相談、子どもの問題を把握し、適切な外部専門機関へ紹介するなどが挙げられ、健康教育を職務の中心とする新しい職種です。

大学でSendall先生から研究指導を受け、情報交換や情報収集をするほか、平成25年度はSBYHNを管轄する行政機関であるQueensland Healthへの訪問や、学校訪問を行いSBYHNと面談をし、平成27年度は外部専門機関への訪問やクイーンズランド工科大学で開催された性教育に関するフォーラムに参加しました。

SBYHNの現状の研究からわが国の養護教諭と比較し感じたことは、文化やそこにいる人が違う、ということでした。例えば、SBYHNは生徒に対し健康教育は行いますが、救急処置は行いません。職務としてすること、しないことをしっかりと明記し、生徒や学校にも適宜伝えていきます。ま

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生



クイーンズランド工科大学キャンパス



SBYHNの相談室

た生徒の個人情報への扱いについて、健康相談を行う前に同意書に生徒がサインしなければいけません。このようなことは日本の文化では起こりにくいだろうと感じました。SBYHNが学校職員ではなく、政府の保健機関からの派遣であることも、養護教諭と大きく異なることです。学校職員として、また教員として勤務している養護教諭と比べると、学校での勤務や教員との連携が難しくなっていました。

一方で、外部の職員であるSBYHNは外部専門機関との連携が得意であることが分かりました。クイーンズランド州にある外部専門機関は、例えば青少年へのサポート施設といった福祉機関や、薬物・飲酒・喫煙防止、性的問題、精神保健、食に関する問題などそれぞれテーマを持った保健機関があり、充実しています。保健機関から学

校への介入もあります。また、クイーンズランド工科大学で開催された性教育に関するフォーラム「Respectful Relationships Education as Violence Prevention」は、学校を中心とした性教育の充実、特に暴力の防止を目的としていましたが、参加者については教師、校長、教頭、Guidance Officer（子どもや保護者に対し教育相談やカウンセリングを行う教員）、Chaplain（子どもの情緒や社会的問題に対応する職員）、SBYHN、保健機関の職員、研究者など様々な職種の方々に参加されていました。学校が学校内の連携に加え、地域や外部専門機関と連携しながら問題に対応している姿勢から、わが国において「チーム学校」推進の面からも学ぶことがあると感じました。

香港中文大学でのインターンシップ参加では、「香港におけるヘルスプロモーションスクール（以下HPS）の現状」を研究テーマとしました。HPSとは、学校を拠点とし、地域や家庭を含む学校全体で組織的にヘルスプロモーションが実践される学校であり、その対象には児童・生徒に加え教職員や地域・保護者も含まれます⁽²⁾。香港では国の支援を受け、香港中文大学のCentre for Health Education and Health Promotion（以下センター）が中心となりHPSを推進していました。このセンターにおいて、受け入れ先教員であるAlbert Lee先生、Vera Keung先生、Tony Yung先生の指導を仰ぎながら研究を行いました。その他、センターの視察、大学の授業参観、公立小学校の視察、香港日本人学校の視察など行いました。

香港のHPSの現状について、香港ではHPSは国家事業として、香港中文大学を中心に実践されていました。実践例として「ヘルシースクール表彰事業」と「HPSを推進する人材の育成」を紹介します。「ヘルシースクール表彰事業」とは、2001年より開始された制度で、金銀銅の表彰があります。このヘルシースクールへの参加は学校の自由意志によります。評価方法としては、学校の参加年に大学センター職員が学校を視察し、学校環境

や子ども、教師、保護者などへのインタビュー及び質問紙調査より学校の健康度を総合的に評価します。最初の評価年の1年後に大学センター職員が学校を再訪し、健康度の上がり具合を評価します。2013年には170校の学校が表彰を受けました(参加校は360校、2014年現在)。

「HPSを推進する人材の育成」について、学校教師のHPSに対する理解度と実行能力を引き上げるために、香港中文大学でヘルスプロモーションと健康教育の専門養成教育コースが1999年に開始されました。このコースの受講対象者は、学校で中心となってHPSを進める教師とされています。香港では養護教諭やスクールナースといった職種の配置はなく、学校保健を担当する教師が各学校で決められていました。その他の取り組みとして校長、教師に向けたセミナーやワークショップが実施され、教師が学ぶ場であるLearning Community for Better Health Educationを組織しています。また、子どもたちに対しヘルスキャプテンの称号を与える取り組みもされています。

国家事業として、大学のリーダーシップのもと、学校の健康づくりに体系的に取り組むこと、エビデンスベースドの評価を行うこと、学校保健を担当する教師に加え、校長や他教職員、子どもたちへの研修制度など、わが国が学ぶことがたくさんあると感じました。

4. インターンシップ参加後

研究については成果を学校保健研究⁽³⁾にて報告いたしました。また、派遣先で知り合った方々とは今でもつながり、研究や大学での勤務の様子などについて近況報告し合える、私にとって貴重な存在となりました。

インターンシップ参加における研究計画の作成、受け入れ先の決定、派遣スケジュールの計画と実行は、研究を深めるだけでなく、調整力や人との関わり方などを学ぶことのできる大変充実した機会となりました。参加させていただき大変感



香港公立小学校の保健室

謝しています。また、インターンシップ参加においてご指導いただいた、兵庫教育大学の松村京子教授、岡山大学の三村由香里教授に深く感謝いたします。今後たくさんの方が参加され、多くを学ばれることを期待しています。

一文 献

- (1) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科「国際インターンシッププログラム」 Available at: <http://www.office.hyogo-u.ac.jp/jgs/guidance/international/internship> Accessed October 23, 2016
- (2) World Health Organization Western Pacific Region 「Health promoting schools: A framework for action」 World Health Organization Western Pacific Region Publication, Manila, Philippines, 2009
- (3) 山内愛, 三村由香里, 上村弘子ほか「ヘルスプロモーションスクールにおけるオーストラリアのSchool Based Youth Health Nurseの現状と課題—School Based Youth Health Nurseへのインタビューをもとに」『学校保健研究』58, pp.227-239, 2016